

平成 26 年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「老化の抑制と疾患の制御における環境ストレスとゲノムの応答」
前半 2 年間の研究状況に対する外部評価

平成 26 年 7 月 30 日、福岡歯科大学 504 号室において本研究の研究発表会が開催され、次いで以下の構成員による中間評価に関わる外部評価委員会が開かれた。その報告を以下に示す。

評価委員会の構成（五十音順）

米国カンザス大学准教授	岩熊智雄	(腫瘍学、生化学)
仏国ナント大学名誉教授	高橋正行	(生物物理学、分子生物学)
九州大学名誉教授	林 健志 (委員長)	(ゲノム科学、分子生物学)

記

研究発表会において各研究課題担当者から質疑を含め約 30 分の研究成果の詳細を聴取した。発表者とその題目は次の通りである。

1. 早川 浩 酸化 RNA の排除機構
2. 井口八郎 酸化ヌクレオチドと遺伝情報発現異常
3. 池邊哲郎 高齢者口腔粘膜の細胞分子生物学的基盤についての研究
— 酸化ストレスによるケラチノサイトの細胞老化と発がんとの関係
4. 梅津佳子 クロマチンリモデリング因子 Rdh54 による染色体安定化機構
— セントロメア特異的ヒストン Cse4 を介した新規作用について
5. 日高真純 発がんを抑制するアポトーシスの機構
6. 岡部幸司 TRP 分子による硬組織石灰化と疾患発症機構の解明
7. 沢 禎彦 歯周病病原菌由来 TLR リガンドによる糖尿病性腎症の発症
8. 米田雅裕 S-PRG イオン溶出液が口腔環境に及ぼす影響
9. 川野庸一 実験的自己免疫性ぶどう膜炎における IL-27 と IL-35 の役割
10. 廣藤卓雄 プロバイオティクスと口腔疾患
11. 坂上竜資 細胞培養技術を用いた歯と歯周組織の再生に関する研究
12. 佐藤博信 顎骨のコラーゲンの特異性に関する研究
13. 大星博明 脳血管障害と免疫・酸化ストレス

発表会冒頭に早川浩研究代表から本事業の趣旨に関する説明があった。それによると本事業は最近社会的にその重要性が注目されている「老化」に関する機構の解明とこれへの対応を研究の大命題として、アクティビティの高い研究者の個々の研究を強くサポートすることにより、当該施設即ち福岡歯科大学に強固な研究基盤を形成することを目指している。従って上記発表課題からも明らかなように、本事業の担い手は、老化に伴う（或はその原因となる）遺伝情報伝達機構のかく乱に関する分子生物学的研究、高齢者

で特に問題となる口腔疾患の基礎及び臨床研究、さらには脳梗塞における障害の分子病態研究までの広範囲にわたる研究グループの混成部隊であり、個々に自由度の高い研究をしている。

発表された研究はいずれも高度に専門的知識と技術を駆使して行われており、これらの成果はそれぞれの分野で最高水準にある。そしてその成果はすでに一流の学術雑誌に数多くの論文として発表されている。これは本事業の充実ふりを如実に示すものである。

特筆すべきは、各研究課題とも比較的少人数の当事者によって遂行されているにも関わらず、世界最先端の技術を積極的に素早く採用し、自らのものとして有意義な成果を得ている。これは研究のモチベーションの高さと、個々の研究者の能力の高さの賜物であり、本事業の組織運営の正しさを証明している。また歯科大学という特徴が生かされ、歯科分野での研究が発展されていることも高く評価される。

この事業の第一回研究発表会（非公開）に比べて格段に研究が発展しており、外部研究者との共同研究も着実に充実しつつある。今後事業内各研究グループ間、及び国内外の異分野の研究者との交流の更なる拡大によって一層の研究の発展が期待される。海外での研究経験を持つ若い研究者の採用がなされたことにも、これからの更なる発展が予想される。唯一今後改善すべき点として、基礎の科学者と臨床の研究者の交流の機会を増加することにより、さらなる研究活動の活性化と成果が期待できるものと思われる。

このたびの研究報告会に、理事長及び学長の参加があり、大所高所からの適切な助言等を得ることができたことから、大学全体での研究向上への理解と意気込みがうかがえた。こうした研究の発展が、教育に反映され、新しい知識やより広い視野を持った歯科医の養成がなされることが期待される。

以上